

シャーロック・ホームズの魅力

—ホームズの人物像について—

犬飼 建治

1. はじめに

シャーロック・ホームズ(SH)作品は、英文法や構文理解の観点からも、高校生用の教材資料として最適です。しかし本稿では、英語教師としてではなくホームズ愛好家(Sherlockian)として、SHのすばらしさを紹介したいと思います。SHにはいろいろな魅力がありますが、あえて1つに絞るとすると、彼の独特な人間性(個性)ではないでしょうか。彼の人物像を知る要素はいろいろとありますが、ここでは彼の知識・能力、性格の二面性、女性観の3つに焦点を当てて、述べてみたいと思います。

2. ホームズの知識・能力

相棒のワトソンによれば、ホームズの知識には偏りがあります。ここで、ワトソン作成の「ホームズの知識および能力の一覧」を、長編『緋色の研究』(*A Study in Scarlet*)からご紹介しましょう。

Sherlock Holmes—his limits

- 1 Knowledge of Literature: Nil.
- 2 Knowledge of Philosophy: Nil.
- 3 Knowledge of Astronomy: Nil.
- 4 Knowledge of Politics: Feeble.
- 5 Knowledge of Botany: Variable. Well up in belladonna, opium, and poisons generally. Knows nothing of practical gardening.
- 6 Knowledge of Geology: Practical, but limited. Tells at a glance different soils from each other. After walks has shown me splashes upon his trousers, and told me by their colour and consistence in what part of London he had received them.
- 7 Knowledge of Chemistry: Profound.
- 8 Knowledge of Anatomy: Accurate, but un-systematic.

9 Knowledge of Sensational Literature: Immense. He appears to know every detail of every horror perpetrated in the century.

10 Plays the violin well.

11 Is an expert singlestick player, boxer, and swordsman.

12 Has a good practical knowledge of British law.

ワトソンはこのリストを見て、絶望のあまり紙片を暖炉の中へ投げ捨てました。ホームズの知識は、常識に欠け、犯罪事件に役立つものばかりみたいですね。ところで、ホームズはまた同作品の中で、知識の整理に関してこんなことを言っています。

'I consider that a man's brain originally is like a little empty attic, and you have to stock it with such furniture as you choose. A fool takes in all the lumber of every sort that he comes across, so that the knowledge which might be useful to him gets crowded out, or at best is jumbled up with a lot of other things, so that he has a difficulty in laying his hands upon it. Now the skilful workman is very careful indeed as to what he takes into his brain-attic. ...'

ホームズの知識は確かに偏っています。しかし、彼は必要な知識とそうでないものとをきちんと分別し、順序よく、整理整頓することが重要だと言っています。情報が氾濫する今日、この言葉は我々が心すべきものだと思います。

3. ホームズの性格の二面性

ホームズについてよく言われることに、彼の性格の二面性が挙げられます。ワトソンは短編集『シャ

ーロック・ホームズの冒険』(*The Adventures of Sherlock Holmes*)に収録されている「赤髪組合」(*The Red-Headed League*)で、次のように描写しています。

The swing of his nature took him from extreme languor to devouring energy; and, as I knew well, he was never so truly formidable as when, for days on end, he had been lounging in his arm-chair amid his improvisations and his black-letter editions. Then it was that the lust of the chase would suddenly come upon him, and that his brilliant reasoning power would rise to the level of intuition, until those who were unacquainted with his methods would look askance at him as on a man whose knowledge was not that of other mortals.

ホームズは事件の捜査や研究・推理活動など頭脳を動かしているときは、気持ちが集中し一心不乱ですが、それが終わると反動として、無気力でだらしなくなるところが確かにあります。

4. ホームズの女性観

ワトソンはホームズから「女性は君の領域だよ」と言われるぐらい、女性に関してはワトソンのほうが上手でした。ワトソンは2度または3度結婚したと言われていて、一方、ホームズは女性に関心を示さず、女性嫌い、結婚嫌いで、独身であったことは有名です。ホームズは、長編『四つの署名』(*The Sign of Four*)の中で、こんなことを言っています。

I fear that it may be the last investigation in which I shall have the chance of studying your methods. Miss Morstan has done me the honour to accept me as a husband in prospective.'

He gave a most dismal groan.

'I feared as much,' said he. 'I really cannot congratulate you.'

I was a little hurt.

'Have you any reason to be dissatisfied with my choice?' I asked.

'Not at all. I think she is one of the most charming young ladies I ever met and might have been most useful in such work as we have been doing. She had a decided genius that way; witness the way in which she preserved that Agra plan from all the other papers of her father. But love is an emotional thing, and whatever is emotional is opposed to that true cold reason which I place above all things. I should never marry myself, lest I bias my judgment.'

ホームズは結婚しないことを宣言しています。そこで、当然ながら、名探偵ホームズはどうして結婚しなかったのだろうか、どうして女嫌いなのだろうか、という疑問がわいてきます。ホームズ自身、推理を行うのに女性との恋愛感情は妨げになるというようなことを、よく言っています。推理による事件解決が、女性以上に喜びと満足感を与え、だからそこに価値を置いていたのではないのでしょうか。Sherlockianたちは、このことについて、さまざまな意見を述べています。実はワトソンは女性だとか、ホームズは結婚しているが、女性ファンのために隠しているのだとか、などなどです。そこで、筆者はどのように考えているのかということになりますが、一応次のような私見もっています。作品の構成上、結婚しないほうがより強くホームズの个性的な人物像を読者に印象づけられる、ということです。読者である多くの中産階級の人々は、家庭をもち、家族をもち、毎日毎日同じような仕事を繰り返し、変化のない単調な生活を送っています。これに対して、ホームズは結婚をしていないから、いつ・どこで寝ても起きても食事をしても何をしても自由です。時間・場所・家族の拘束がない、自由の身です。これは読者にとって、1つのあこがれではないでしょうか。探偵業はホームズにとって、飯の種というよりは、仕事そのものにやりがいがあっておもしろく、好きでやっている仕事です。一方、中産階級の人々は、いやな仕事でもやらなければ飯の食い上げです。そもそも探偵業は、定時に始まり、定時に終わるような仕事ではないのです。家に帰ると、妻が温かい食事を用意してくれているのでは興ざめします。寝ずの番の仕事もあります。規則正しい生活などは考

えられません。要するに、読者とホームズでは、仕事や生活のスタイルがまったく違います。自分には経験できないこうしたスタイルに、読者はあこがれるのだと思います。

いま上で述べたことには、作者コナン・ドイルの人生観・結婚観が投影されているのだという意見もあります。彼の自伝を読むと、結婚生活のむなしさ、辛さがうかがえます。しかし、騎士道精神から、また紳士として、妻を捨てることはできない、その苦悩を読み取ることができます。そういう作者の実生活が、ホームズに独身の身分を提供したのだという見方もできるかもしれません。

5: まとめに代えて

ホームズの活躍したイギリスのヴィクトリア朝時代に、respectableという言葉がありました。この語の意味は「まともな、世間並みの、見苦しくない、上品な」などです。そしてrespectable manとは、仕事をもち、結婚して家族・家庭をもった男性を意味していました。

一方、ホームズの生活を見ると、収入もあり、服装も上品でまともな格好をしています。ホームズは上流階級にこそ属していませんが、十分にrespectableという言葉に当てはまる人物です。しかし、常識の欠如や偏った知識、気力にはムラがあり、探偵という不規則な職業、推理の妨げになるとして結婚しない独身者、やはりどこか変わっています。こんな男性は社会からすれば異端者でしょう。しかし、当時のイギリス社会を形成する分厚い層のrespectable menは、自分とは違う生き方をするこの探偵をこよなく愛したのです。

引用文献

Doyle, Sir Arthur Conan: *A Study in Scarlet* (2007), Penguin Books.

Doyle, Sir Arthur Conan: *The Adventures of Sherlock Holmes* (2007), Penguin Books.

Doyle, Sir Arthur Conan: *The Sign of Four* (2007), Penguin Books.

参考文献

延原謙 訳『緋色の研究』新潮社 2012

延原謙 訳『シャーロック・ホームズの冒険』新潮

社 2012

延原謙 訳『四つの署名』新潮社 2012

(兵庫県立芦屋高等学校 教諭)